

ティーチング・ポートフォリオ



小野 浩司
佐賀大学文化教育学部 国際文化課程

第4回ティーチング・ポートフォリオワークショップで作成

作成日：平成23年3月3日

目次

はじめに

I. 教育の責任

II. 教育の理念

III. 教育の方法

- 1) 授業の環境作り: 授業を受ける側の姿勢
- 2) 授業の環境作り: 授業を行う側の姿勢
- 3) 英語の4技能に優劣をつけない
- 4) 学生のニーズに合わせた授業: TOEIC テストと英会話
- 5) 学生同士あるいは教師と学生のコミュニケーションのための教室作り

IV. 教育の成果と改善

- 1) 学生の評価とそれに対するコメント
- 2) 学生の評価を受けての授業の改善策

V. 今後の目標

- 1) 短期的な目標
- 2) 中期的な目標

VI. 添付資料一覧

1. TOEIC を効果的に学ぶための厳選単語集
2. 学生の提出物に対するコメントとそれを受けての学生のプレゼン内容
3. 学生による授業評価アンケート結果
4. TOEIC の授業で用いたテキスト
5. 自作のテキスト

はじめに

はじめにお断りしておかなければならないことは、私は総論と言うものあまり興味がない。英語の教師を20年以上務めてきた私が、英語の授業をさておき、一般論として「教育とは何か」、「教育とはどうあるべきか」ということをここで述べるのは、自分がどこか別の世界のことを述べているような気がしてならない。そういうわけで、私が作成するポートフォリオはすべて英語教育という視点を踏まえてのポートフォリオである。

I. 教育の責任

私は文化教育学国際文化課程欧米文化選修の教員として、教養教育運営機構、文化教育学部そして大学院(教科教育専修)の3つのレベルの授業を担当している。過去3年間の担当授業科目の一覧は以下のとおりである。なお、各授業のシラバスは佐賀大学の規定によりすべてWeb上で一般に公開されている。

科目名	対象学年	種別	開講年度・学期	受講者数	概要
英語学演習 I	学部3年	選択	2008-2010 後期	5-15	英語学の基礎知識を学ぶ。
英語音声学演習 II	学部2年	選択	2008-2010 前期	15-30	英語の母音・子音さらには語・句の発音を学ぶ。
英語音声学演習 III	学部2年	選択	2008-2010 後期	10-30	英語の文の発音とイントネーションを学ぶ。
日英異文化コミュニケーション I	学部2年	選択	2008-2010 前期	15-30	英語でプレゼンテーションをすることで、相手に自分の意思を伝えるコミュニケーションの能力を養う。
英語 3	学部3年	選択	2010 後期	30	英字新聞を読むことによって英語の読解力を養う。
英語	全学1・2年 (年間5~6コマ)	必須	2008-2010 前期・後期	30-50	おもに TOEIC テストに関する問題を解かせて、英語力を高める。
卒業研究	学部4年	必須	2008-2010 通年	1-6	卒業研究の指導を行う。
英語学特論 II	大学院1年	選択	2008-2010 前期	1-4	学校文法からさらに一步発展させるための英語学の授業。
英語学特別演習 II	大学院1年	選択	2008-2010 後期	1	英語学で修士論文を書くための準備を行う。

上記の表で特徴的なことは、教養教育での英語の授業数が多い(全体の半数近く)ということである。これは、英語力の差に開きがあるクラスで授業を行わなければならないということを意味している。そもそも英語能力が高い学生は問題ないが、中学校レベルの英語力しかもたない学生への指導は、細心の注意を要し、教師の側の指導力がとくに問われる。私は、このようなクラスにおいてこそ、しっかりとした理念と方法をもって学生の指導に当たらなければならないと考えている。

本務校での授業のほかに、以下のような活動をしている。

- 1) 非常勤講師—福岡大学で教養英語を 2000 年から週 2 時間担当している。
- 2) 2010 年度佐賀大学公開講座(「TOEIC テスト講座—目標は 600 点」)
- 3) 2010 年度教員免許状更新講習の講師
- 4) 2009-2010 文化教育学部 FD 委員長
- 5) 2008-2009 教養教育機構外国語部会長

2)の佐賀大学公開講座では TOEIC 対策講座を実施した。受講者数は 15 名で、職種は中学校・高等学校教員、一般企業の職員、佐賀大学の職員、高校生などさまざまであった。この講座は受講生の間から「来年もぜひ継続して欲しい」という声が多く寄せられ、好評であったので、来年度以降も開講の予定である。

II. 教育の理念

佐賀大学の理念の中には「国際的視野を有し、豊かな教養と深い専門的知識を生かして～地域社会及び国際社会の発展に寄与することを目的とする」ということが謳われている。また、私が所属する文化教育学部国際文化課程の理念のなかにも「広い国際的視野に立って～従来の文化学的な古い枠にとらわれない学際的なシステムの中に学ぶ」ということが謳われている。いずれの理念にも共通して「国際的視野」という文言が含まれていることから、この観点からの教育あるいは授業の取り組みというのがわれわれ教員に課せられた重要な課題であることは明白である。そして言うまでもなく、この理念達成には「英語の習得」ということが不可欠である。私自身も、このような理念を否定する気はさらさらしないし、追求する価値の十分あるものだと確信している。しかし、現状はというと、むしろこの理念からどんどん遠ざかっているのではないかという印象を受ける。私が佐賀大学に赴任した 15 年前に比べると、明らかに学生の英語力は落ちている。文の意味を正しく理解できないことは言うに及ばず、誤った発音を覚えていたり、動詞の過去形が言えなかったり、仮定法や現在分詞といった文法用語を知らないなど、挙げれば切りがない。このような現状を目の当たりにすると、学生に「国際的視野」を持たせるという理念の実現は大切であるが、その前にまず英語の教師として目の前の学生の英語力を身につけさせることが急務だと感じてしまう。私自身は、遠くにある崇高な理念を求めるのではなく、実際の教室で起こっている様々な問題を直視し、その問題に対してどのように対処すればいいのかを考え、真に学生にとって有意義な英語の授業を目指すことを心がけたいと思っている。もちろん、私の一方的な思い入れだけで授業が正常に進むことはないので、常に学生の満足度をチェックしつつ、学生がこの授業で求めているのは何であるのかを確認しながら、私自身もそして学生も満足に行く授業をめざしたいと思っている。

Ⅲ. 教育の方法

このような理念を実現するためには、様々な方法が考えられるが、私がとくに大切に、守っている方法を以下に書き出す。

1) まず取り上げたいのは、教室の環境作りである。私が学生の出席を取り始めてもおしゃべりを止めない、あるいは携帯を見続けている、というようなことは今やありふれた光景である。もちろんこのような傾向は今に始まったわけではないが、最近はとくにそれが目立つようである。しかし、このような環境の中では、90分間学生に集中力を持たせることはもちろんのこと、一定の学習効果、すなわち、私の場合は今以上の英語力のアップを期待することは困難である。なぜなら、そのような行為を放置してしまうと、学生はその行為が許されたと誤解し、それぞれが授業中に思い思いの行動を取ってしまうからである。先ほど「理念」のところで、「実際の教室で起こっている様々な問題を直視し」と書いたのは、まさにこのことである。教師として、私はこのクラスで私自身に対しても、また、学生に対しても満足のゆく授業を遂行できるのか、あるいはできないのかを見極め、もしできなのであれば、その時点で対処しなければならないと考えている。そのために私の採る方法は実は簡単で、教室というのは学問をする場所であり、友達といるときのように気ままに自由に振舞ってよい場所ではない、ということを繰り返し言い続けることである。これによって学生は最初は私のことを煙たがるかもしれないが、教えられる者と教える者の間には、心地よい緊張感が必要であり、この緊張感がなくなったとき、学生は授業中に携帯を取り出す、隣の人とおしゃべりを始めるのである。教室の環境作りは私が私の掲げた理念を実現するために最も重要な点の一つである。

2) 私の教育理念のもう一つの柱である、「学生にとって真に有意義な授業を行う」という理念を実現するためには、今度は教師の側の努力というものが不可欠である。英語の授業はテキストに沿って行われることが多いが、一般にはテキストに書かれている内容は大学の教員であれば予習をしなくても理解できる内容であることから、教材研究無しで授業を進めることは可能である。私自身もそうした経験を何度もしたことがある。しかし、この点は反省の余地が十分あり、今後はプロ教師としての自覚を持ち、学生の英語力を高める努力を惜しまず、より効果的な指導を目指したいと思う。授業中に質問が出ないのは学生の理解力が劣るからではなく、私の教え方が悪いからであるということ肝に銘じたいと思う。

3) 「学生にとって真に有意義な授業」を私は「英会話を話すための授業」だとは考えていない。昨今はコミュニケーション能力=会話能力になってしまい、「話すための英語」の学習が重要視されている。このような考えが間違いであると断定はしないが、われわれの日常生活が話すだけで事足りているわけではないことも事実である。私は今パソコンを使ってこの文章を書いているし、今朝はポータフォリオに関する書籍を読んだばかりである。家を出るときにはニュースを聞いていた。文字通り、書いて、読んで、聞いて生活しているのである。言語を使いこなすためには「読む、聞く、話す、書く」の4つの技能が必要であり、これらに優劣をつけたり、あるいは1つの技能にのみ集中させたりすることは、むしろ言語習得の正常な発達を阻害することになると考える。日本人が6年間英語を学習しても少しもしゃべれないということは事実であるが、だからと

言って話す能力だけを伸ばすということは実は不可能であると思う。読むから話せる、聞くから話せる、書くから話せるのである。学生にとって真に有意義な英語の授業を行うという理念を達成するためには、英語の 4 つの技能に優劣を付けず、時間の許す限りこれらの能力の開発に努めることであると私は考える。

4) 「学生の満足の行く教育を目指す」ということを理念にあげたが、そのことの実現のために私は TOEIC テストの教材を授業に採用している。TOEIC テストは毎回全世界で 70 万人近くが受験していると言われている世界規模の資格試験であるが、最近日本の多くの企業でもこの試験の結果が採用時に利用されていることは周知のことである。つまり、この試験は就職に直結しているのである。就職難である昨今、少しでも就職を有利にするために TOEIC を受験する学生が増え、佐賀大学でも多くの学生が現在受験している。TOEIC とは Test of English for International Communication の略であり、コミュニケーション能力開発のための試験である。コミュニケーション能力を伸ばし、かつ、就職にも役立てたいという学生のニーズを満足させるためにはぴったりの題材と言える。私が教養の授業で TOEIC 対策のテキストを用い、学生に実際に TOEIC テストの受験を促すのはこのためである。授業中では、受験に役立つように、私が厳選した単語集を配るようにしている(資料 1)。

専門の授業を受ける学生の中には、英語教師を目指す学生や、留学を希望する学生が多くいる。このような学生にとっての緊急の課題はやはり「話すための英語」なので、いかに 4 技能の重視と言っても、この場合は学生のニーズに合わせてなければならぬと思っている。「異文化理解コミュニケーション I」はまさにこのニーズを満たすための授業で、英会話能力の向上を目指している。この授業では、一人の学生に約 3 分間の英語によるプレゼンテーションをさせ、その後約 5 分程度の質疑応答の時間を設けている。英語を人前で話す力と、それに対して英語で質問する力の両方の力を養うことができる。学生はプレゼンテーションの原稿を前もって私に提出することになっており、私はそれを添削して学生に返却する(資料 2)。このような作業は英語を書くための力を養うのに役立つと考える。

5) 教養、専門のいずれの分野にも共通する大きな問題が英語教育には存在する。それは、学生が一度も口を開かずに授業が終わってしまうという問題である。50 人のクラスであれば、その日の授業中に 1 回も指名されず、したがって、一言もしゃべらず授業が終わってしまうこともありうる。語学の授業で、学生が声を出さず、ただ黙って学生が 90 分を過ごす授業ほど恐ろしいものはない。このような事態を防ぐために、私は二人一組あるいは三人一組で、たとえば、テキストの一部を読み合わせたり、その日に起こったことなどを英語で言わせるようにしている。とにかく授業中に声を出すということが大切であり、そのために教室が騒がしくなったり、笑い声が聞こえたとしても、そのときは気にしないようにしている。クラスメートとの会話であれば、教室の雰囲気や和むことになる。テキストを使った場合に陥りやすい訳読中心の授業を少しでもコミュニケーションの方向へ向かわせるためにも、二人一組の作業は有効であると思われる。これは私が考える「授業への環境作り」の一つの具体例でもある。

IV. 教育成果と改善

1) 学生の評価とそれに対するコメント

佐賀大学は年2回、前期と後期に学生による授業評価アンケートを実施しており、私も担当する全授業に対してアンケートの提出を学生に義務付けている。以下に、そのアンケート結果の1例(抜粋)を示す(添付資料3)。

授業科目：英語 金曜2校時

実施日：平成22年7月2日

実施対象者数：22名

学部：教養教育機構

A	あなた自身について	この授業の平均
1	出席率はどれくらいですか	4.90
2	予習を毎週どの程度していますか	2.50
3	復習を毎週どの程度していますか	1.90
4	この授業の学習目標を把握していますか	4.04
5	この授業の成績評価基準を把握していますか	4.09
B	授業内容及び授業方法	
6	この授業の内容は理解できる	4.04
7	この科目を受講してみて、内容への興味が増した	3.86
8	黒板・ホワイトボード、スライド等の使い方が効果的である	4.00
9	教材(テキスト、配布資料、その他)はわかりやすかった	4.27
10	シラバスは学習する上で役に立った	4.27
11	授業内容はシラバスに沿っていた	4.54
12	声の大きさ・明瞭さは適切だった	3.18
13	話す速さは適切だった	3.11
	教員の対応	
14	授業をわかりやすくする工夫が感じられた	3.95
15	学区制の質問に適切に対応してくれた	4.19
16	この授業を受講して満足が得られた	4.05

(2)と(3)の予習・復習の時間数以外の数字は5点満点である。平均すると4点以上であり、この授業が学生から受け入れられたことがわかる。このクラスの学生は素直で積極性があり、授業がしやすかったと記憶している。使用したテキストはTOEICの問題集である(参考資料4)。ただし、

自分では問題が無いと思われた(12)の「声の大きさ・明瞭さは適切だった」や(13)の「話す速さは適切だった」が意外に点数が低いことがわかった。このように意外な結果はやはりアンケートを取ってみなければわからず、改めてアンケートをとることの大切さを実感した。もちろん、来年度の授業ではこの点での改善を行ってゆくつもりである。

私は自らの教育理念として、「学生にとって満足のゆく教育」というものを掲げた。それが果たして実現できているかどうかを示すのが、項目(7)「この科目を受講してみて、内容への興味が増した」と(16)「この授業を受講して満足が得られた」である。授業の内容に対して学生が興味を示さなかったとしたら、それは教え方が悪いのである。どんな教材であれ、自分が選んだ教材である限り、それを用いて学生に満足してもらうような授業を行わなければならないと思っている。そうでなければ、学生は嫌なことをさせられているという気持ちになり、そこに学習効果はうまれない。幸いに上記のアンケート結果では学生の満足は得られたことが示されているが、いつもそうなるとは限らず、常に初心者の気持ちで授業を行うよう今後も努力し続けなければならないと思っている。

2) 学生の評価を受けての授業の改善策

アンケートの結果から私の話すスピードが予想以上に速いことがわかる。私のほうでこれぐらいはわかるだろうと思っていることでも学生にしてみれば理解が困難な場合が多々あるようである。このような状況を改善するためには、ある程度授業が進んだ段階で学生の理解度を確認する作業が必要と思われる。今後は教壇から降りて、直接学生の席に出向いて、学生の反応を見ようと思う。このほか、学生が質問をしやすい環境を作り出すことも大切な仕事である。Ⅲ-4)で紹介した「日英異文化コミュニケーションⅠ」で学生が積極的に意見を言えるようになったのは、それを無理やり強要するのではなく、自らが意見を述べたくなるように仕向けたからである。他の授業においてもそのような方向へ学生を導くことができるようにしたいと考えている。

自分の理想とする授業を行うために自らテキストを作ることも考えている。私自身は昨年教養の授業で使用するテキストとして、Welcome to News English (共著)を出版した(資料5)。これはニュース英語をとおして、英語の読解力を増すためのテキストであるが、今後機会があればTOEIC関連のテキスト出版も考えている。

他の教員の授業を参観するというのも、授業改善の有効な手段だと思う。佐賀大学では毎年1回教え方の上手な教員を表彰し、その教員による公開授業が行われているが、今後は積極的にこのような授業への参観を行いたい。もちろん、将来的には自分の授業を他の教員に見てもらうことも考えなければならないであろう。

V. 今後の目標

1) 短期的な目標

比較的短期に学生への指導力をアップさせるために以下のような目標をたてる。

① FD 活動への参加

佐賀大学では現在さまざまなFD・SD活動が行われており、そのなかにはラーニング・ポートフ

オリオに関するものや、ティーチング・ポートフォリオに関するものも含まれている。これは大学側がなんとか教員の授業改善の手伝いをしようという、一つの意思の表れであるが、われわれ教員もこのような大学の努力を無視することなく、積極的にこのような会合に出席する必要がある。私自身も年6回は行われるFD・SD講演会のうち半数の講演会には出席しようと思う。

② 学生の授業評価アンケートの積極的な利用

これまで比較的漠然と眺めていた学生による授業評価アンケートの結果を真摯に受け止め、点数の悪い項目については積極的に改善の方向へもってゆくように心がけたい。先ほども触れたように、「声の出し方」や「授業の進め方」は来年度からの授業からさっそく改善したい。また、学生には単なる数値の入力ではなく、授業の感想を文字で書いてもらうようにする。授業改善には学生の生の声が必要不可欠だからである。

③ 授業中以外でのケア

私が担当する授業は平均40名から50名の学生がいる。そのようななかで、個人個人が抱える英語の悩みを聞く時間は実際上はない。たとえば、TOEICを受験したいが、どのような勉強をすればいいのかわからない学生は以外に多い。そのような学生を支援するために、学生が気軽に尋ねることができる研究室の環境作りを目指すつもりである。

④ e-learning の活用

従来型の授業（テキストを読ませ、CDを聞かせ、訳読させ、覚えさせる）のほかに、e-learningなどのシステムを利用することを考えている。現在佐賀大学ではリメディアル教育用のe-learning教材を開発中であるが、英語が苦手な学生のためには視覚に訴えるこのような教材のほうが有益である場合があり、今後積極的に取り入れようと考えている。

2) 中期的な目標

まず英語嫌いの学生を作らない、その上で就職にも役立つ英語力を身につけさせたい、というのが私が今後目指す教育上の大目標である。現状では大学に入学してますます英語嫌いになる学生も多いが、そのような学生に共通の特徴として、中学校・高等学校での英語の成績が悪かった、という事実がある。「英語がわからない＝英語嫌い」という図式を壊すために、このような学生に対するリメディアル教育の可能性を模索したい。もちろんこの問題は私一人でどうなる問題でないので、学内にリメディアル教育チームを結成し、カリキュラムの編成から、新しい教科書作りまで、様々な問題を検討して行きたいと思っている。

英語がコミュニケーションの道具であるというのは真実である。そしてそれが道具である以上、英語は使われなければならない。そこで当然のことながら、リメディアルの段階を経た学生が次に向かう先は、コミュニケーション能力を養い、それを実践することである。実際に海外に赴いて自らの英語力を試すというのも一つの手であるが、必ずしもそうする必要はない。幸い佐賀大学には海外から沢山の留学生が来ている。そして彼らの多くは英語が話せるのである。私は、これらの留学生(大学院生)をティーチングアシスタントとして採用し、実際の英語の授業に参加さ

せたいと思っている。

この他にも、大学の中に留学生が運営するカフェを作り、学生が自由に留学生と対話できる環境を作りたい。そのような環境に多く接することで、外国人への恐怖心を減らすことが出来るであろうし、ひいては英語によるコミュニケーションへの恐怖心をも減らすことが出来るであろう。

英語の教師である以上英語で授業を行うことはある意味当然である。将来的には教養の授業であっても、英語を使った授業を行うことが望ましいと考えている。しかし、これを実現するにはまだクリアしなければならない問題がいくつかある。まず、学生の反応である。質問して何も答えず、ただ首を振るだけの学生に、英語でちゃんと答えさせることは至難の業である。教員のなかでも英語で授業への反感は強い。これらの問題を一つ一つ解消して、あるべき英語教育の現場にしたいというのが私の目標である。